

生きる意味って何？ なんて大袈裟すぎるか。じゃあ毎日毎日、生活していくのはどうしてなんだろうって。こんなこと思つたことなかつた。でも今思つてるってことは、思わないようにしていただけかもしない。どうせおれには流れに棹差す勇気なんてないから。ならなんとなくでも、生きるしかない。だいたい生きる意味とか考えなくともしばらく生活ができた。好きな学校に行く。好きな友達と会う。好きなお酒が飲めるようになる。増えていく。好きな時に映画館に逃げ込む。気の済むまで日は延ばせる。思いのままに夜を伸ばした九畳間。狭くて広い部屋は安全な宇宙。なんとなくで楽しく生きていられる。あくまでファッショソ辛さ。生きる意味って何？ 考える時間。無意味とは言わないけれど、だつてなんだか合理的じやない、って思つてた。生きるしかない。おれには生きていくしかない。心も身体も、まだ死にたくないし。もしみんないなくなる時はおとなしく一緒にいなくなるたいと思うけれど。それだつてひとりならまだ死にたくない。一緒に死にたい人と一緒に生きたい。ミヤザキさんと一緒に死ねるんだつた悔いなんて全然無いからきっと本望。だから今は生活する。部屋の中でミヤザキさんを眺める。それだけで溢れてくる生活の匂い。生活を続ける。

こつちの水道水はまずい。そのうちに浄水器を買わないといけない。醤油にも味噌にもまだ口が慣れない。空気が悪いと悪態をつく。毎日眠くないのに早く寝る。毎日眠いのに早く起きる。日の入らない部屋に座り込んで、一日中画面と向き合っている。たまに逃げ出したくなる。ぐつと堪えている。お昼にカップ麺は毎日食べれば飽きるから、パスタ一五〇グラム茹でる。冷凍うどんを茹でる。それでも飽きたら冷凍の蕎麦を見つける。冷麦二束は一人には多すぎる。夕方五時のチャイムはきつかり一分間。ここは東西線の街。

土曜の朝、すいている電車の窓からスカイツリーが見える。風が強く吹く。ここは海の近い街。新浜通りは海拔〇・五メートル。駅まで歩いて十五分。ひとりで歩けば遠いし、ふたりで歩けばもうちょっと短い。十八時四十分。会社から帰ってくるミヤザキさんを迎えて行く。十九日はケーキ屋さんに寄り道してからゆつくり歩く。二十四時間営業の西友。お惣菜と朝ごはんだけ買って帰る平日。心なしかよそよそしい菓子パン。サイゼリヤでグラッパ飲んだら金曜日。家に帰ればミヤザキさんの小さなお弁当箱を洗う。大きな青い水筒を洗う。三日に一回、洗濯物を室内干しにする。ミヤザキさんが会社に着ていくシャツに、覚えたてのアイロンを丁寧にかける。夕飯に餃子を焼いたらフライパンの油を拭き取る。油って、そのまま流したら水道局では赤いランプが点くらしいよ。一度の間違いは繰り返したくない。主夫になりたい。まだ慣れない。西浜公園。ティクアウトのビリヤニ。週末のショッピングモール。南行徳は光の森。道端にトカゲが消えていく。じきに夏が来る。

ひとり暮らしへ、五年目ですね。自己紹介が終わった延長線上でふと口をついて出たけれど、それは嘘でした。よく考えてみたら、ぜんぜんひとりで暮らしてなかつた。少なくともここ一年くらいは、ミヤザキさんのために生きている。自分でも気づかないうちに、どうやらそうみたいだつた。こんなにも救われている。ぼくはもうほんとうのひとり暮らしへできません。寝る前に一言でも電話しないとなんだか寂しいなんて、本当に人が変わつたみたいだ。知らない自分に戸惑う前に、ミヤザキさんはスイッチが切れたように眠る。卒業式を待つて戻つてきたミヤザキさんのみじかい襟足。黒染めしたてのカラー剤の匂い。爆発するとめんどうだから、シャワーは朝に浴びることにして先に寝てしまう。それもそろそろやめて、ちゃんと湯船に浸かるう？でもそうすると身体はかゆくなるし、でもシャワーで済ませると首も肩も凝つてしまう。汗かく季節をミヤザキさんは嫌う。落ちていく夢。暑がるミヤザキさんは隣でトップスを捲り上げてしまい、ぼくは眠れなくなる。二十三時半。境界線をぐちやぐちやにしながら落ちていく。すっかり慣れきつてしまつた、ふたりでひとつのシングルベッド。寝言が聞こえない。ふた

りがまたひとりとひとりになる。枕が移動する。またひとつ生活が消えていく。

初任給が入金された四月の金曜日。綱島の男の子たち。社宅でも部屋の中では当たり前にひとり。寝付けないから入浴。自律的な自慰行為。修正する。たまにもっと早起きする。本当の満員電車に乗る。名前だけ知っている街が、生活の一部になる。電車に乗っている。貯蓄用の口座なんて開設したから、簡易書留でキヤツシュカードが送られてくる。家にいないから、再配達の申し込みをする。ミヤザキさんがすこしでもはやく貯金ができるように、食事代ぐらいは多めに払いたい。でも今のうちにぼくだって貯金しておきたい。だつて来年には一緒に住みたい。ちょっといま、つらいかもしない。でも貯金するしかないから。そのために働く。そのために生きていくしかない。これだつてできるんだつて、証明するしかない。きっと一年前ならつまらないと言つだらう。でもミヤザキさんと二人で暮らすことができたなら、それがどれだけ素晴らしいことだらうつて、毎日考へている。一日の終わりに一緒にいる。一緒に寝る。それが毎日になる。片道五四三円で飛んでいける今のは暮らしもべつに不満じやないけれど。ぼくは帰る家だつて同じがいい。貯つた合鍵は絶対になくさない。さつさと三百万円、貯金してみせたい。指先で摘んで持ち上げた計画性。近い未来が見えないから。ぼくにはほんの少し先のことさえ想像ができないから。引っ越してきた次の日、ひとりで渡る鶴見川は長かった。四月三日。電話の向こうのミヤザキさんの前で、ぼくは泣いた。木曜日、ひとりで飲むノンアルコールビールはあまりに不味くて笑つてしまつた。情けなかつた。だから未来を見る前に、まず貯金からはじめる。たとえ面白くなくても、生活は止められない。過去の速度ははやいけど、未来の速度は遅いままだつて。ミヤザキさんが言うなら。その遅い未来に一緒に生きたい。小さな未来をツリーに共有する。日曜のお昼、携帯ショッピ。そのあと四つ角のイタリアン。ペペロンチーノにしらすがかけ放題。ぼくの誕生日、ミヤザキさんは平日なのに即興でいちごのケーキをつくつてくれた。週末には手紙までくれた。新しいスニーカーで歩く。新品のめがねの匂い。

お気に入りのベーカリー。思わず笑ってしまった。惰性の羅列じやない。今度は本当に嬉しかつたから。

健康な生活をやめない。作業じやない。出社の日はお弁当をつくる。タツパーに一日分ずつ。狭いキッチンでも、料理は止めない。小さなバスルームで、たまにはお湯を張る。社宅の光熱費は定額。生活は当たり前じやないから、必死こいてやるしかない。日比谷線の二人掛けの座席にはミヤザキさんとふたりで座りたい。健全な定食屋。黄色い壺漬けを食べて、ミヤザキさんが働いていたファミレスを思い出したい。金曜の夜は日高屋でいつか、にも、土曜日の夜はバーミヤンでいつか、にも、時々なりたい。駅前のパン屋さんにはたまごドーナツ。夕方のマルエツ、割引シールの卵焼き。じいちゃんが昔つくってくれただし巻きを思い出したい。じいちゃんの言うはんぺんは卵焼きだつた。お父さんみたいな大きなくしやみは我慢できるようになりたい。二十歳みたいなリクルートスーツは早く卒業したい。はやくふたりになりたい。ミヤザキさんの胸の中はセーフティ・ゾーン。裸で抱き合う以外の確認方法。ミヤザキさんが部屋着にしている緑のジャージ。ミヤザキだ、と胸のゼッケンを指でなぞると、まだミヤザキだよ、と笑う。原色が似合う。お気に入りだつた柔軟剤は販売停止になりそう。たばこの匂いがなんだか苦手になつた。でもこうして笑つていて。米袋をひつくり返してうずくまつて泣いているミヤザキさんの背中をけんめいに抱きかかえる台所。ミヤザキさんの目から水が、ぼくのTシャツの左胸までファンデーションを運んでくれる。ミヤザキさんはたまに泣きむしになる。そんな日になるべく一緒にいたい。黒板の裏側も、ベッドの下の景色もまだ忘れてない。自分の生活はおぎなりにしたくない。逃げずに歯医者行く。コンシーラーなくさない。この暮らしは背後には置いていけない。今日も明日もミヤザキさんの隣にいたい。まだこれが第一幕だと思いたい。きっと同じ層からこの世界を見ているから。波が高い。だからあと三年待つ。海が見たいね、はもう遠くない。方角を合わせる。朝になつたらすぐにカーテンを開ける。あじさい。六月になる。雨が来る。